

引き続き彈壓の嵐の後を受けて氣息奄々の状態に陥つて
その活動力を喪失せる一方、非常時意識の刺激によつて
労働組合の國家主義乃至國家社會主義への轉向が行はれ
、従つて労働争議は之の數に於ては、その質に於ては著
しい減退を示した。斯くの如く闘争を否定せる労働組合
は、次いで自己の存在意識に對して懷疑的傾向にすら陥
り、昭和九、十年頃にかけては漸次御用組合化への道を
辿らざるを得なかつた。

上述の如き政治經濟部面に於ける激動、従つて労働運
動に於ける急旋回はまた當然協調會活動の上には強い影
響を及ぼさずには置かなかつた。殊に昭和六年の第五十
九議會に内務省によつて提出された労働組合法案が、資
本家団体の反對に遇つて葬り去られて以來、再び提出さ

れること加なかつたといふ事實も亦斯かる情勢の端的な
現れであつた。その創立以來労働組合法の制定を主張し
てきた本會の活動方針も漸次變化せざるを得なかつた。
「労働協調」は茲に新情勢に對應する新たなる角度より
検討せられざるを得なかつたのである。次に昭和九年三月
に開催された本會第十五回評議員會に於てなされた床次
副會長の挨拶を引用して、その間の消息を窺ふことにし
よう。

「……本會は創立以來十六年になりますか、當時と
顧ますれば實に感慨深きものか御座います。當時は階
級闘争を信条とする急進過激の思想の甚だ熾んであつ
た時代の御座いますから、労働者側よりは激烈なる憎
悪を受け、労働者に同情を持つ學者評論家等より北輕